

『擲金抄』の分類について

佐伯 雅子

1 はじめに

『擲金抄』は、中巻・下巻のみが残る書物である。双貫語と対句になる語や句が、部類の中に挙げられ、作詩の便宜を図ったものと推察される。『擲金抄』の解題については、佐藤道生氏の研究があり、氏によると、「佚文の宝庫」である（『『擲金抄』解題』『平安後期日本漢文学の研究』2003年5月。初出は『『擲金抄』の撰者』『新古今集と漢文学』（和漢比較文学叢書第13巻、1992年、汲古書院）、及び『擲金抄』（真福寺善本叢刊第11巻、1998年、臨川書店）。）これをオントロジの立場で見ると、日本漢詩のオントロジの宝庫ともいべき分類と語句にちりばめられているのである。本稿では、『擲金抄』の分類を概略することによって、平安朝の漢詩文のオントロジの一端を見ることにする。

2 『擲金抄』の分類

まず、中巻の目録題を見ると、次のとおりである。

神仙 仏法 経句題 文学 武勇 音楽 伎藝 術道 産業 宝貨 飲食 服玩具
儀飾 資用 乗御 光彩 音声 薫香 方角 遠近 員数 疊字 伊呂波 贈答
勒韻

本文には「飲食」部までしか収録されていない。佐藤氏は散佚した上巻に、下巻の絶句部と同様の「天象 天時 地儀 居処 植物 動物 人倫 人事」の存在を推定されている。いずれにしても、本文では分類の途中から途中までしか残っていないのである。

そして、中分類の下に小分類があり、細目が挙げられている。さらにその下に双貫語や詩句が挙げられ、これらの分類の集合の中に含まれる言葉や詩句が列挙されているのである。

更に下巻の分類について見ておこうと思う。双貫部の分類は次のとおりである。

天象 年次 日夜 地儀 居処 植物 動物 人倫 人体 人事 仏神 文学 部
伎 音楽 宝貨 飲食 服飾 儀飾 乗御 光彩 方角 員数 雑事

そして絶句部は次のとおりである。

天象 天時 地儀 居処 植物 動物 人倫 人事 雑物 神霊 仏法 積奠 読
書 詠史 文学 祝言

これらの分類は異同があるものの、名称や配列に平行な関係をめざしたものであることはいえそうである。扱われる語や詩句の性格も考慮に入れなくてはならないが、分類基準としては、できるだけ同一のものを同一の順序にしようと努めたといえよう。

これらの語や詩句は、律詩の頷聯や頸聯から引用されたことは既に佐藤氏によって指摘されている。小分類に近い詩題の詩の語や句を切り取ったものであろう。

これらの大分類は中巻下巻に共通するが、さらに「経句題」は、独自に分類をしている。「経句題」の分類と句題を示すと次のとおりである。

項目	詩題
天象	如日之照 北野
天象	香風時來
天象	風動出妙音
天象	慈意妙大雲 勸学会
時節	日夜思惟
時節	晝夜常精進
時節	經於千歲
地儀	安住希有地
地儀	七宝為地
地儀	国土莊嚴
地儀	其國甚清淨
地儀	經過嶮路
地儀	欲過此險道
地儀	其路甚曠遠
地儀	入於深山
地儀	經行林中
地儀	詣靈鷲山
地儀	弘誓深如海
地儀	其心安如海
居處	宮殿甚嚴飾
居處	七宝為台
居處	珍妙樓閣
居處	止宿草庵
居處	入如來室
居處	安處法座
植物	天雨曼陀花
植物	散衆名花
植物	其華開敷
植物	觀樹亦經行
植物	詣宝樹下 北野
植物	宝樹多花菓
植物	其數如竹林
仏法	仏放眉間光 序品
仏法	供養於仏 北野
仏法	供養諸仏

項目	詩題
仏法	見仏聞法
仏法	世尊妙相具
仏法	世尊大恩
仏法	世尊甚難值
仏法	供養詣諸如來
仏法	當得作仏
仏法	說法求仏道
仏法	願成仏道
仏法	以求仏道
仏法	深入仏道
仏法	內秘菩薩行
仏法	聞法得果
仏法	四方求法
仏法	流布此法
仏法	不染世間法
仏法	說是大乘經
仏法	広宣法花經
仏法	畢竟住一乘
仏法	持仏淨戒
仏法	聚砂為仏塔
仏法	見大宝塔
仏法	尋來至仏所
仏法	往詣僧坊
仏法	此經為尊
人事	至親友家
人事	化諸衆生
人事	容顏甚奇妙
人事	弁才無濁
人事	神智無量
人事	智惠深遠
人事	多聞智惠
人事	壽命無數劫
人事	更增壽命
人事	財富無量
人事	感皆歡喜

項目	詩題
人事	須臾聞歡喜
人事	扶得安穩
人事	仏所護念
人事	一心欲見仏
人事	念々勿生疑
人事	漸々修学
人事	定慧力莊嚴
人事	功德甚多
人事	功德不可数
人事	其福不可限
人事	久殖徳本
人事	常行頭陀行
人事	但行礼拝
人事	住於空閑処
人事	独处閑静
人事	寂寞無人声
雑物	如貧得宝
雑物	大獲珍宝

項目	詩題
雑物	我献宝珠
雑物	如浄明珠
雑物	身相金色
雑物	瑠璃為地
雑物	施大宝帳
雑物	又如浄明鏡
雑物	如暗得灯
雑物	撃大法鼓
雑物	清浄好歌声
雑物	種々伎楽
雑物	常作衆伎楽
雑物	乘是宝車
雑物	如渡得船
雑物	光明照世間
員数	唯有一乘法
員数	海為第一
員数	仏説希有法
員数	常住不滅

経句題の分類は、

天象 時節 地儀 居処 植物 仏法 人事 雑物 員数

になっていて、その性格上かなり集約されているが、中巻や下巻双貫部・絶句部の大分類に共通した名称と配列である。経句題は仏法部の一部にも解釈できるようになっていて、その中で入れ子式にまた大分類と同じ方法で分類・配列されるのである。

3 中巻「神仙部」の分類を例にして

次に中巻「神仙部」の分類を見ることによって、中巻の分類の特徴を見ることにする。

中分類	小分類	詩題	双貫語 詩句
神仙部	神(社廟同付神徳)		柏城○松壩
神仙部	神(社廟同付神徳)		古社○靈祠
神仙部	神(社廟同付神徳)		朝祈○暮賽
神仙部	神(社廟同付神徳)		枌楡○松柏○雲雨○鼓笛○苾芬
神仙部	神(社廟同付神徳)		黍稷○蘋蘩
神仙部	神徳		精靈如在○感応不空
神仙部	神徳		丹祈叶意○玄応在身
神仙部	神徳		冥恩○靈鑑

中分類	小分類	詩題	双貫語 詩句
神仙部	神德	1 花香明徳中	1 黍稷添薫苔壩露○蘋蘩引氣柏城風
神仙部	神德	2 松樹頭神徳	2 郊北廟道天曆瑞○城南祠駐夜琴声
神仙部	神德	3 月明神徳中	3 秋嘗地冴陰雲卷○暮賽天幽行雨晴
神仙部	社		粉榆煙老○松柏風高
神仙部	社		礼奠○苾芬
神仙部	社		明徳○靈威
神仙部	社		朝祈客○暮賽人
神仙部	社		柏幽○松老
神仙部	社		木綿○金帛
神仙部	社		苔壩○柏城
神仙部	社		松壩○叢祠
神仙部	社		蘋蘩礼○雲雨行
神仙部	社		瑚璉○苾芬○粉榆
神仙部	社		蒼柏○翠松
神仙部	廟		松邑○松壩○苔壩○柏城○叢祠
神仙部	廟		蘋蘩○蒹藻
神仙部	廟		祠壇○壩地○沙壩
神仙部	廟		紙錢○錦繖
神仙部	廟		木綿○紫傘
神仙部	廟		春禴○秋嘗
神仙部	廟	4 古廟夕松樹	4 仙壇覆蓋不知歳○靈地託根遂頭米
神仙部	仙		真人○靈族○羽客
神仙部	仙		鶴駕○霓旌
神仙部	仙		霞衣○羽駕○風馭
神仙部	仙		青牛○白鹿
神仙部	仙		丹丘○紫府
神仙部	仙		青松○黄石
神仙部	仙		金母○玉妃
神仙部	仙		龍師○魚吏
神仙部	仙		茅君○桂父
神仙部	仙		松子○梅生
神仙部	仙		瑤田○瑤樹

中分類	小分類	詩題	双貫語 詩句
神仙部	仙		駕鶴○驂龍
神仙部	仙		滄霞○飲露
神仙部	仙		金骨○玉姿
神仙部	仙		翠蓋○朱纓
神仙部	仙		延年久○却老遙
神仙部	仙		梅生思○桂父心
神仙部	仙		霓裳○雲服
神仙部	仙		茅君洞○華子岡
神仙部	仙洞		小有○太真
神仙部	仙洞		勾曲
神仙部	仙洞		崑崙
神仙部	仙洞		林屋○華陽
神仙部	仙洞		蓬萊宮○勾曲山○十二樓
神仙部	仙洞		鶴警千年○孫期七世
神仙部	仙洞		壺中○象外○塵外○霓裳○雲碓
神仙部	仙洞		葉欄○茨岫
神仙部	仙洞		赤松澗○白石山
神仙部	仙洞		紫桂林
神仙部	仙洞		桂陽山○松子亭
神仙部	仙洞		境伝方術○棲隔乾坤
神仙部	仙洞		玄圃○紫庭○黃一
神仙部	仙洞		芝洞○桃源
神仙部	仙洞		羽人○宮妓
神仙部	仙洞		蓬山夜月○桃浦春風○葉畝
神仙部	仙家		蓬萊万里○崑閩二山
神仙部	仙家		茅君鶴○葉令鳧
神仙部	仙家		五雲○九霞○万歲
神仙部	仙家		丹霞鎖洞○白日昇天
神仙部	仙家		三神山○七世鄉○万年洞
神仙部	仙家		雲車○風駟
神仙部	仙家		雲輦○霞衣
神仙部	仙家		雲車○霞袂
神仙部	仙家		蓬嶋○茅山○茨岫○芝砌○桃浦○菊水○蓬宮
神仙部	仙家		蓬山○茅洞○茨山○菊溪○桃源
神仙部	仙家		梅生○松子

中分類	小分類	詩題	双貫語 詩句
神仙部	仙家		茅君○李老○麻姑
神仙部	仙家		桂父○松喬○赤松王喬(二人名也)
神仙部	仙家		麻姑○梅生
神仙部	仙家		鳳笙○鶴駕○鳧舄○鸞驂○羽服○羽衣○羽駕
神仙部	仙家		鳳簫○羽蓋
神仙部	仙家		鳳台○鶴廟
神仙部	仙家		壺中○塵表○象外○塵外
神仙部	仙家		金母○玉妃○籊史○金骨○金籙
神仙部	仙家		蓬海○茅峰
神仙部	仙家		赤城○玉城○玉京○青溪○瑤池○玄都○黃庭○玄圃
神仙部	仙家		紫桂○紅桃○碧桃○紫芝○瓊樹○赤松○丹藥
神仙部	仙家		三山○三嶋○三壺○三茅○五城
神仙部	仙家		葛陂龍○華表鶴○茅洞鶴
神仙部	道士		仙材○真籙
神仙部	道士		紫府○丹台
神仙部	道士		六甲文○万年術
神仙部	道士		授業○觀形
神仙部	道士		無為道○衆妙門○不老方
神仙部	道士		感星○夢日

中巻では、双貫語と詩句が混在して出現する。即ち、「神（社廟同付神徳）」「柏城○松壩」から「神徳」「1 花香明徳中」の詩があり、その部分は双貫語ではなく、対句である詩句が出現する。そして、3 句続いた後、また双貫語になっているのである。小分類の中では、双貫語が挙げられた後、詩句が挙げられる順番になっているが、他の分類を見ると、双貫語のみのものもあり、詩句のみのものもある。項目の中には 1 双貫語のみ、2 双貫語と詩句、3 詩句のみの 3 種類のものがあるようである。

次に重複する用語について見ておこうと思う。たとえば、「松壩」は 3 例ある。分類の「神（社廟同付神徳）」には、「柏城○松壩」の双貫語として、「社」には、「松壩○叢祠」の双貫語として、「廟」には「松邑○松壩○苔壩○柏城○叢祠」として出てくる。即ち「松壩」は、「神」「社」「廟」の下位語と位置づけられると同時に、「柏城」「叢祠」「松邑」「苔壩」「柏城」「叢祠」の双貫語としての属性を持つのである。

もう 1 つ例を挙げると、「木綿」は 2 例ある。これも、「社」「廟」の下位語としての位置づけと同時に「金帛」「紫傘」の双貫語としての属性を持つことになる。

4 おわりに

『擲金抄』では、詩句や双貫語を詩から切り取ったものである。これらの句や語は詩とおして分類項目と密接な関係を持つことはいうまでもないことだが、実際に切り取って見ると、出典の明らかでないものは、抽出の経緯が不明な場合はその関係性が定かではないものもある。

むしろ私には摘み取った詩句や双貫語が一人歩きして、新たなことばの世界を楽しむことが一つの享受の方法として存在していたようにも思える。詩文における「言語」のオントロジーとして、『擲金抄』はその評価を見直していきたいと思う。